

論文の和文要旨

<b>Title</b>	<b>The Nordic Peace</b> <b>Approaches, Solutions, and Principles</b> <b>of Conflict Transformation</b> 北歐的平和均衡：紛争構造の変換のためのアプローチ、解決手法 とその原理
<b>Name</b>	グンナール レークヴィック <b>Gunnar Rekvig</b>

この論文は「ノルディック・ピース（北歐的平和均衡）」の歴史と現状を解釈学的手法で分析する。その平和均衡の源泉と原理を、北歐諸国間に起きた個々の紛争とその処理の歴史的経緯から導き出す。それらの原理が、北歐を紛争対立もしくは消極的平和地域から積極的平和地帯へと変化させたものと定義する。

この論文は以下の問題意識を掲げる。

- 1) 北歐の歴史的な紛争処理はどのように対立要因を平和均衡へと変換させてきたか。そして2) その北歐的紛争処理に普遍的な可能性はあるか。

これらの問いに答えるため、平和均衡に向かう試みが北歐的紛争処理として初めて認知され、そして「北歐」の地理的概念が確立した1814年以降に起こった3つの歴史的事例を分析する。それらは、1) ノルウェーとスウェーデンの連合化。これはナポレオン戦争の結果ノルウェーに強制され、以後紛争の原因になっていたが、最終的にスウェーデンからの分離独立が平和裡に達成された。2) シュレースヴィヒ=ホルシュタイン問題。これは、デンマークとドイツの国境に位置する2つの公領の併合を巡る2つの戦争であり、第一次世界大戦後、住民投票によって解決され、双方の領域にマイノリティーとしての民族の生存権が確保され解決した例である。3) オーランド諸島問題。フィンランドがロシアから独立した1918年、この領有権を巡ってスウェーデンと対立。この問題は、国際連盟の仲裁によって解決されたばかりでなく、関連国全てにとって軍事的重要な拠点であった同諸島が完全に非武装化そして中立化された。

さらにこの論文は、北歐的紛争処理が、平和均衡に向けた一つのパターンとして連続的に認識されたその他4事例を分析する。それら是对立よりも平和的解決策を希求する外交文化の出現が、その地域に安定をもたらすことを証明する。1) デンマークとノルウェー間の東グリーンランド問題。2) アイスランドのデンマークからの平和的分離独立。3) ノルウェーとロシア間のバレンツ海における領海線の平和的確定。4) カナダとノルウェー間のハンス島の領有権問題。

これらのケースは対立要因への実践的な解決策となり、この地域を持続的平和地帯へと変換させた。

この地域の平和を実証する包括的な原理性は、通常、激しく相反する2つの原理：「民族自決権」と「領土的一体性」を和解させ変節させた事実に存在する。これが北歐地域を持続的安全保障共同体の確立へと導いた。

日本と北東アジア地域には、北歐地域が乗り越えてきた対立構造に類似したものが存在する。それらは、1) 日中間の尖閣諸島問題、2) 日韓の竹島問題、3) 日露の北方領土問題、4) 第二次世界大戦の戦争責任を巡る歴史解釈問題、である。これら北東アジアの対立は平和均衡に至っていないので、北歐地域のそれと対比させることは学術的に意義がある。

北歐的平和均衡は、紛争当事者に双方両得の解決策を生み出す最適な帰結として位置付けられる。これは北東アジアが好むゼロサム解決策とは対象的である。仲裁に委ねられ解決策は達成されなかったケースでも、国家を超え醸成された平和的均衡が、ゼロサムを好む各国の政局と敵意の醸成を抑制し、結果、平和裡の解決に導いた。